「文樂」餘事

北條秀司

今度の「文樂」事件では、大分大阪を騒がしたやうだ。大阪を愛し、大阪人の誇りを抱きつゝ書いた作品が、鄕土に於てあんな障害にぶつからうとはゆめにも考へなかつた。「だんじり囃子」「王將」「文樂」と、これで大阪に取材した作品を三つ書いたので、東京の口のわるい友達が、お前は大阪から宣傳費を貰つてるんぢやないか等と私を冷評したが、あべこべに大阪の舞臺から追放の憂き目に遇ひかゝつた。

大體、新聞の上で知つて貰つて居ると思ふから、事件の內容を此處には繰返さないが、大阪府會代表と云ふ連中の知性缺除、藝能に對する無理解には些か啞然とした。こうした連中が大阪の文化政策に關與して居るのかと思つたら、鄕土の爲に暗澹たる氣持を感じた。

府の社會教育課長の中村さんと云ふ仁は、大阪の藝能文化に對して、相當の寄與をされて居ると聞いたが、議員達の中村さんに對する態度は實に暴慢で、あれでは中村さんも嘸かしやりにくからうと同情した。

暴慢と云へば、議員達が興行者側に對する態度も實に暴慢で、歌舞伎座の幹部達など、彼等の一喝を喰らうと、眞蒼になつて慄えて居た。昔から弱い芝居者とは云ひながら、あまりにも卑屈で腹が立つた。

腹が立つたと云へば、市會からの訂正申入れを丸のみ込みして、早速二の替りから「文樂」を引込めようと聲明した興行者側の腰の弱さにも腹が立つた。どうしてそれほどまでにあの連中を恐れなくてはならないのだ。そんな態度を示すから、彼等をますます附け上らせるのではないか。

府議代表は、作者も亦芝居者の同族と思つたものか、私に對しても實に無禮であつた。まるで戰時中憲兵が一兵卒を叱りつけるやうな態度で、私に臺詞の訂正を命じた。

大阪の作家達はいつもこんな扱ひを受けて居るのかと思つたら、ムラムラと憤りが込み上つて來て、よし！　一つ此奴らに、作家と云ふものへの眼を開けてやれと、必要以上に怒つて見せ、必要以上に面罵してやつた。後で考へて少し大人氣なかつたとも

思つたが、あの連中を啓蒙するには、矢張りあの方法が一等よかつたのだと思ひ直した。それでも二三の刺戟的な臺詞は自發的に、訂正してやつた。

次の日、中村課長が、高安六郎氏、須藤五郎氏等と共に芝居を見に來られ、文化人的雰圍氣の中で懇談し、需めに應じてさらに一二の臺詞を私は訂正した。高安、須藤兩氏は府の教育顧問とか文化顧問とかの資格で見えられたらしかつたが、お二人とも、これでもう訂正の餘地は無いと言明せられ、中村さんもこれで結構でせうと云つて歸られた。私もそれですんだものと思つて、歸京の支度をして居たら、突然、二の替りから「文樂」を取止めると云ふ記事が各新聞に出、急に騷ぎが大きくなつたのである。經過を書くつもりではなかつたが、一部の新聞に三氏が問題の箇所を全面的に削除しろと云はれた風に報道された向もあるので、一寸訂正して置く。あの日お三方の意見が議員側に受入れられて居たならば、今度の事件はこれほど大きくはならなかつたと私は思ふ。それはお三方の弱さと云ふよりは、文化人の意見を重んじなかつた議員側に責を持たさなくてはならないものだらう。此のやうに、文化が輕視されつゝある現實を、大阪の文化人諸氏は一體どうお考へになるか。今度の事件でも、大阪の文化人達が一つの組織體を持つて、純民間人の立場から私の藩屏となつて吳れて居たら、どんなに賴母しかつたか知れない。ジヤアナリスト達、特に藝能記者諸氏が孤立無援の私に寄せられたあたゝかい支持には深く感謝を感じて居る。また連日激勵の書を寄せられた未知の市民各位にも深甚の謝意を表したい。

後半此の事件は演劇の問題を離れて、文樂助成金の費途に及んだりし、作家としての鬪爭の限界を越えるやうな氣もしたが、本年度の豫算には十萬圓の助成金が計上されて居ると云ふ話も聞いたから、此際その正體を究明して、今後は効果的な助成が行はれるやうにすることも、文樂を愛する意味に於て必要だと思つたから、敢へて渦中に身を委ねて居たのである。

畏敬する山城少掾が、天皇行幸の記念日に老軀を挺して調停に立たれる事がなかつたならば、私は劇作家組合と連絡を取つて、飽く迄も府市會の强壓と興行者の弱腰を是正してやるつもりであつた。此の一文は正良なる議員諸氏には不滿を覺えさせるものと思ふ。しかし、あのやうな連中を代表に選出された諸氏にも重大な責任のある事を考へられ、之を諒とされたい。

文樂座の現實に就ても書きたいのだが、他の機會にゆづる。（劇作家）